

# レポート

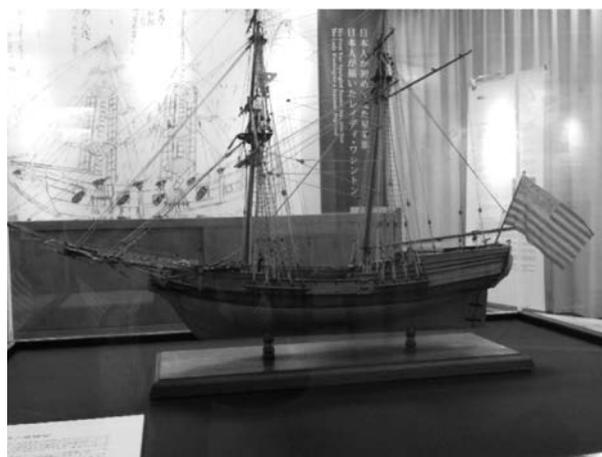
## 2 串本町の日米修交 225周年 ～グレイス号の 航海日誌を新発見～

(一財)和歌山社会経済研究所 研究委員

高田 朋男



1791年4月29日の出来事を誤解していたかもしれない。単なる偶然で漂着した米国の二隻の船（レイディ・ワシントン号とグレイス号）だと思っていた。そして交流の実態もなく立ち去ったと勝手に思い込んでいた。しかしながらノンフィクション作家の佐山和夫氏の著書である『わが名はケンドリック』（彩流社）を読むと、偶然というより意図された修交のための訪問だったと考えられる。しかも地元大島の住民が、「最大限のもてなし」をしており、その実態についても、今回の日米修交225周年記念行事（2016.11.1）に合わせるかのように新発見された航海日誌で、およその状況が明らかになった。このコーナーでは、串本町長の田嶋勝正氏へのインタビュー内容と新発見のキーパーソン、櫻井敬人氏（太地町歴史資料室学芸員・ニューベッドフォード捕鯨博物館顧問学芸員）について紹介していきたい。



日米修交記念館にて撮影

### 1. 新発見の航海日誌について

櫻井敬人は岡山市の出身だった。通常であれば、太地町や鯨とのかかわり合いがないはずである。それが違った。高校生の時、C.W.ニコルの『勇魚』を読み、古式捕鯨の魅力にとりつかれたのだ。それ以来、たびたび太地町を訪れることとなる。

そして大学、大学院と進むにつれ、ますます日米の捕鯨の歴史に興味を抱くようになる。特

にアメリカには、捕鯨を専門とする博物館もあり、アラスカには先住民の捕鯨の歴史があった。渡米した櫻井は、ケンダル捕鯨博物館の学芸員のインターンを経て、ニューベッドフォードの捕鯨博物館のアシスタント・キュレーターとして勤めるようになる。博物館が所蔵する日本コレクションを担当し、また日米交流150周年を記念して開催されたジョン万次郎に関する企画展なども手掛けた。そして2006年の秋に太地にやってきて、歴史担当の学芸員となった。

人間と海の関わり合いの歴史に興味のあった櫻井は、ペリー来航の62年前に串本にやってきたアメリカ船にも強い関心を寄せていた。何故かと言うと、ニューベッドフォードとウエアハム（ケンドリック船長の家所在地）とは車で20分ほどの場所にあったからだ。これは偶然ではなく、ニューイングランド地方は、アメリカ建国の歴史で重要な役割を果たしているのだ。アメリカが、世界最大の海洋国家となっていく端緒となり、道を切り開いた地方だからである。例えばメイフラワー号で入植したのもこの地であった。このようなことが重なり、米国の捕鯨史だけでなく、日米交流に関しても勉強していきたいと考えていた。当然、アメリカの二隻の船、レイディ・ワシントン号とグレイス号が来て、間もなく225周年になることを気にかけていた。2015年の秋（10月）、串本町にコンタクトしたところ、町の方でも翌年の225周年の準備をしていたとのことだった。その後、トントン拍子に話が進み、櫻井はウエアハム歴史協会に連絡を取って、串本町が225周年の記念行事を行うので、展示できるような資料はないのか、問い合わせを行った。これが功を奏し、グレイス号の航海士であったサミュエル・デラノの航海日誌の新発見につながった。一次資料が発見されたのは、初めての出来事である。いままでは二次資料に基づくものばかりであった。

そこには、日本人が我々の船に乗船してき



提供：櫻井氏

て、薪や米をくれたこと。これは明らかに友情の印である。当初は、島の高いところから、やりのようなものを持って見張っていたが、しだいに受け入れ

られた模様が記されていた。10日間の滞在（1791年4月29日～5月8日）によって確かに日米交流が図られた。特にリラックスした時間を持てた様子がその記述から窺えられるからだ。このことから、おそらく船上で食事を伴う懇談が行われたのではないか。それは、アメリカ側が祝砲を打ったことにも顕れている。

ケンドリック船長を始めとしたアメリカ人が、10日間に亘って、初めて日本国内で星条旗を柵引かせ友情を結んだ。日米関係の歴史の中で最初の一ページを開いたのは、間違いなく彼らであり、串本町民であった。（物語風にまとめたので敬称は省略させていただいた）

## 2. 田嶋町長へのインタビュー

平成28年11月1日、串本町で「日米修交225周年記念式典」が催された。米国の、友好の歴史について確かめ、一層の友好促進を誓い合ったという。ここで田嶋串本町長にインタビュー内容を紹介したい。

**聞き手（高田）** 昨年（平成28年）の11月1日に日米修交225周年の記念行事をされましたが、その経緯と意義について教えていただけませんか？

**町長** エルトゥールル号はメジャーな話

なって、串本イコールトルコとなっているんですが、日本側も米国側も、ちゃんとした文献に載っていないこともあり、日米修交記念館が串本にあることがあまり知られていないんですね。トルコとの交流行事が一段落したんで、今後は、日米修交についても何とかしたいと思いました。というのも日米修交記念館が、老朽化してきているんですね。建て替えるにしても、今の展示物以外にどんなものがあるのか、調べてみようということになったんです。

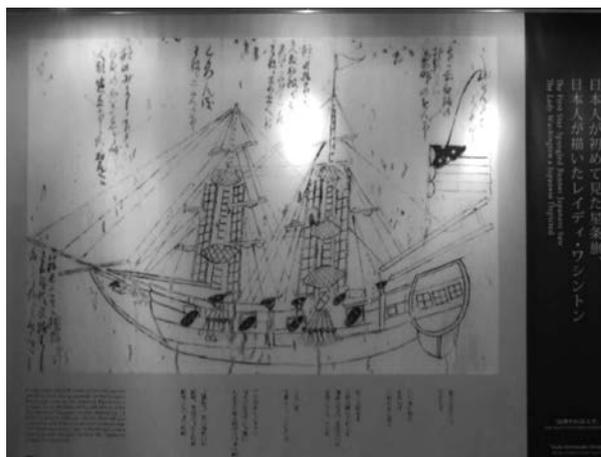
そんな時、太地町の三軒町長からのご紹介もあり、太地町で学芸員をされている櫻井さんが日米関係の海の歴史について、すごく研究してくれていたんで、彼に依頼することにしたんです。しかも現地の歴史学者、リドレー氏とは友人関係だったんですね。こういう経緯で224年に当たる2015年に櫻井さんが、渡米して調べることとなりました。

私は、ケンドリック船長の生家が博物館になっているので、そこで何か展示物を借りれるだろうと思っていたんですが、実際はそういうものがなくて、櫻井さんから連絡で、それより面白い物があると言ってきたんです。グレイス号の航海士が書いた航海日誌が家の屋根裏から見つかったんです。

あの文献がでてきてから、米国側の対応が違いましたから。それほどの発見でした。



筆者撮影



日米修交記念館にて撮影

225年前に見たこともない米国人がやってきたわけです。最初は、やりを持って見張っていたんですが、数日くらいおいて、受け入れているんですね。薪をあげたり米をあげたりしているんです。船に乗せてもらい、いっしょにご飯をともにしたと思われる記述もあるので、もし事実なら、アメリカ人と日本人の史上初のパーティだったと思います。ペリーの来航とは、全く違う友好ムードが存在したわけです。あらためて日米関係の歴史的な一歩が、ここ串本において記せられたと思いました。こんな友好的な関係が見つかる、首を切られるから、早く帰ってくれと村の長が述べたと書かれています。最後は、併走して送り出し、見送った模様まで書かれていますから、本当に貴重な資料を発見したと思いました。

**聞き手** 面白いお話ですね。もし一緒に食事をしたということになれば、ビジネスオンリーではなく、友好的に交流する意志があってこそできるものだと思います。次に、今後の日米修交についての思いはいかがですか？

**町長** シアトルに近いグレイス・ハーバーでは、レイディ・ワシントン号が完全な形で復元されて教育船として運行されています。もしこの船が、私どもの串本に来たら、一層、注目されることになるかと考えています。また、リドレー氏が、詳細にこの航海日誌を調

べており、あらたな事実が発見されれば連絡をしていただけることになっています。どういふ事実が出てくるか、今から楽しみにしているんですよ。

**聞き手** そうですね。もしレイディ・ワシントン号が来たら、大イベントになりますね。田原小学校の生徒とウエアハムの小学生が交流していると聞いております。着実に、日米修交が串本町に根付いていると思えました。本日はお忙しい中、お話をお聞かせいただきありがとうございます。

町長へのインタビューの締めくくりとして、佐山和夫氏の『わが名はケンドリック』の一文を紹介しておきたい。この来航の意義が端的に示されているからである。

「それよりも重要なのは、建国間もないアメリカが、そのスタートの時点で早くも日本との通商の意志を持って臨んでいたということである。通商が行われたか、行われなかったかを問題とするより、彼らがアメリカの国旗を掲げてここに至り、国名を告げ、その新興国の存在を知らせ、通商の意図を示していった事実をこそ、問題にすべきではないか。1787年の出発のときに、船主たちは日本に立ち寄ることを計画の中に含んでおくようケンドリックに伝えてあったが、確かにそのとおりに、彼はジャパンに来ていたのであった」

### 3. 結 び

日米修交記念館が建っている檜野崎。そこに暫く立っていると、広がる海原が胸の中に押し寄せてくるような思いに捕らわれた。海の持つ存在感が違うのである。この海なら、アメリカやトルコからやってくるだろうと思った。太平洋に突き出し大きく開かれたまさに外界の先端にいる、そういう感覚が芽生えたからである。思うに、日本列島（本州）を弓の張った形に譬えると、太平洋に向けた矢じりの先がここ

であろう。

佐山和夫氏の著書を読むまでは、私自身、この出来事の重要性を認識していなかった。そしてこれは日本側における一般的な反応だと思った。例えば、今回の日米修交225周年記念行事をみても、キャロライン・ケネディ駐日大使からのビデオメッセージ、アレン・グリーンバーグ在大阪・神戸総領事の参加など米国側の熱心な対応に比べ、日本側の対応は今ひとつに思える。この温度差は一体何だろう。それは、日本側の「漂着」に対して米国側の「国代表として資格を有する商船の渡航」という認識の差であろう。そしてそれ以外にも地政学的な視点が影響しているのではなかろうか。それは米国におけるニューイングランド地方が果たしてきた歴史的な役割とその重要性である。おそらく米国側は、その重要性を肌身で感じているにちがいない。それに対し串本町はたとえ外界に開かれた地であっても、もちろん江戸からは遙かに遠く、紀州藩にあっても政（まつりごと）の中心地からかけ離れた地であったことが災いしているように思う。

そして日米修交のきっかけを鑑みると、言うまでもなく、江戸からさほど離れていない浦賀に現れたペリーの来航が脚光を浴びている。翻ってこの来航は、そもそも友好的とはいい難い側面を併せ持っていた。一方、串本町大島への来航は、交易こそなされなかったが、極めて友好的なものであった。いわば日米における“時”が至っていなかっただけである。それゆえ、日本側が事の重要性に気づくとともに、新発見された航海日誌によって、さらなる興味深い事実が提起されることを期待して筆を置きたい。

**【参考】** 機関誌 vol.74 に掲載されている佐山和夫氏の随筆も是非ご参照ください。